

2018/03/18

「神を信頼するとは？」

「聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

(ローマ 10:11)

信頼には二種類あります。一つは理性や証拠に基づく信頼、もう一つは、心情に基づく信頼です。日頃の仕事ぶりを見て信頼して仕事を任せる等は、理性に基づく信頼で、誰が何と言おうと自分の子どもだから信じるとか、あなたのことが好きだから信じる、というような信頼は心情に基づく信頼です。

では、神を信頼するとは、どのようなことでしょうか。

#### ■理性や証拠に基づく信頼

「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」(ローマ 10:17)

ギリシャ語では、「信頼」と「信仰」は、同じ言葉が使われています。つまり、「信頼は聞くことから始まる」ということです。

神の言葉を聞くことによって、神を信頼することができるようになるというわけですが、確かに、聖書そのものが私たちの理性に訴える存在です。聖書があるということ自体が、イエス・キリストが神であることの動かない物証だとも言えるのです。

聖書は旧約聖書と新約聖書に分かれていて、最も古い文書と新しい文書には、何千年もの隔たりがあります。それらは、それぞれの時代にそれぞれの状況で神の靈感を受けた人達が書いたものであり、指揮を執った人間がいるわけでもないのに、一貫した一冊の内容になっているのです。なぜこのようなことができるのか、そこには神の力が働いていると認めざるを得ません。

人間を死からいのちに移すという救い主に関する記述は、旧約聖書の初めから一貫しており、新約の時代になり、実際にその方が来られたことが記されています。旧約聖書で救い主を表す「油注がれた者」という言葉が、ギリシャ語では「キリスト」と訳されました。イエス様が十字架にかけられることになる裁判で、裁判官が「お前はキリストか」と問うと、イエス様は「その通りだ」とお答えになりました。旧約聖書からの長い歴史が途切れることなく、語り続けられているのです。

また、聖書が事実を教えているのであれば、キリストの復活も事実であるはずですが。このことに関する客観的証拠はいくつもあります。一例としては、ユダヤ人の伝統であった安息

日がキリストの復活と共に土曜日から日曜日に変わったことがあげられます。当時のユダヤ人は土曜日を安息日とし、一切の仕事をせず礼拝だけをする大切な日として、かたくななまでに守り続けてきました。ところが、突然、それが日曜日に変わったのです。長い伝統を破って安息日が変わったのは、週の初めの日、すなわち日曜日にキリストが復活したからです。

その他にも、当時のローマ帝国の激しい迫害の中で、キリスト教が発展し、伝統まで変わった背景を考える時、キリストの復活が事実でなければ、説明のつかないことがたくさんあります。もし裁判をするなら勝訴できるだろうと言われるほどの状況証拠がそろっているのです。

さらに、イエスが本当にキリストならば、その教えも真実だということになります。聖書の教えを、一つ一つ理性で判断する時、多くの人がそこに真実を認め、聖書の教えを基本にするキリスト教の国家が数多く誕生しました。

これらはほんの一部であり、聖書について、客観的に調べると、その教えは真実であり信頼に足るものだと言わざるを得ません。つまり、聖書は、理性や証拠に基づいて信頼できるものであると言えるのです。このような理性や証拠に訴える説明は、クリスチャンではない人達に、聖書を説明する時にもよく用いられます。

## ■信条に基づく信頼

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」(ヨハネ 14:26)

信条に基づく神への信頼とは、神が私たちの心に働きかけ、助けてくださることによって信じることができるという信頼です。それを助けてくださる方が聖霊様です。私たちが信じる神様は、三位一体の神であり、それぞれ独立した人格を持つ三名の神様が一つとなって働かれる神様です。その三位一体のおひとりである聖霊様が、私たちの中に働きかけ、神の言葉を思い起こさせて、神様を信頼できる信仰を与えてくださるのです。これは、理性や努力によるものではなく、神が下さる賜物です。

心情に基づく信頼とはどのようなものか具体的に確認してみましょう。

### 1. イエスがキリストだと信じることができる

私たちは、自分で神を信じたと思っているかもしれませんが、実はそうではなく、神様があなたに働きかけて信じることができるようになったのです。理性で神を信じるには限界があります。神が教えてくれなければ、なぜイエスがキリストでなければならないか理解できず、理性では最終的な一歩が踏み出せないのです。

ある時、イエス様は盲人の目を癒しました。まわりの人々は、それを怪しみ、彼をパリサイ人のところに連れて行きました。目の見えなかった人は、一貫して「イエス様が治してく

れたのだ」と主張しましたが、パリサイ人たちは信じません。彼らは、もしイエスがキリストならば安息日に癒しを行うはずがないと言って、イエス様を迫害し続けていたからです。

「そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。」彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」(ヨハネ 9:24-25)

目の見えなかった人は、「難しいことはわからないけれど、彼がしてくださったことはわかる。」と言って、パリサイ人達に屈しませんでした。これが心情的信仰です。パリサイ人達は、知識で信仰を持とうとしたために、イエス様を信じる事ができませんでした。そこで、彼らは目の見えなかった人を会堂から追放したのです。

「イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がお方を信じる事ができますように。」イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」(ヨハネ 9:35-39)

「人の子」とは、キリストのことです。彼は、キリストを信じましたが、何か自分で努力したわけではありません。ただ、神に助けられただけです。ここで、イエス様が言うおられる「さばき」とは、見えない者が見えるようにして下さることです。つまり、神が働きかけて、信じさせて下さることなのです。

私たちが神を信じられるようになるのも、まさに神が私たちの目を開いてくれたことによるのです。

## 2. 御言葉が信じられるようになっていく

聖書は、神は病を癒し、問題を解決して下さると教えます。それは、理屈や理性では理解できないことですが、私たちは、神がそういうならそうなんだと信じる事ができ、病のいやしや問題の解決を祈り求める事ができるのです。

今、日本の教育では進化論を教えますが、聖書は、すべての命は神が造ったと教えており、クリスチャンはそれを信じています。神が助けて下さるから、世の中の科学がどう言おうと信じられるのです。クリスチャンの中にも科学的に様々な立場を取る人達はいますが、実際のところ、進化論は一つの仮説に過ぎず、他国の学校では他の仮説もきちんと教えられていますから、進化論を信じるのは、神を信じるのと同じ信仰の世界です。聖書の言葉を素直に信じる立場を福音派と呼びます。

### 3. 何があってもあきらめない

神の助けによって、信仰が理性に左右されなくなると、見える状況に左右されてあきらめることがなくなっていくます。神への信頼は、それを乗り越えさせてくれるものなのです。

#### ■両方の信頼を併せ持つ

私たちは、理性による信頼と神が助けてくれる信頼とを併せ持つことが必要です。それは、理性も心も全面的に神に依存するということです。神に依存すると、私たちは次のように変えられていきます。

#### 1. 自分の罪を告白できるようになる

信頼する人には、隠し事をする事なく、何でも話せるものです。本当に神様を信頼して全面的に依存するならば、自分の重荷を神の前に差し出し、助けを乞うことができるようになります。

「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」

( I ヨハネ 1:9-10)

神のことばが本当に自分のうちに働いたら、誰もが例外なく自分の罪に気づくことになります。自分を愛するように隣人を愛せよ、自分を憎む敵を愛せよと聖書は教えますが、そんなことはとてもできません。嫉妬や怒りを覚えたことがない人も、誰かと自分を比べたことがない人もいません。もしそう言う人がいたら、それは嘘つきだと聖書は言っています。神のことばが心に入れば入るほど、自分が罪深いことを認めずにはいられないのです。この時、神様に「助けてください」と願うことが、神に依存するということです。

#### 2. 自分の弱さを受け入れられる

人はいろいろなものを手に入れては、自分の弱さを隠して、自分は誰にも頼る必要はないと助けを拒否するものです。しかし、神を信頼するとは神に依存することですから、自分の弱さに気づかない限り、神を信頼できません。人は、弱さを自覚すると、助けてくれる相手を頼るようになります。つまり、弱さを自覚すると、神が見えてくるようになるのです。

パウロは、神に仕えているのに、どうしても罪を犯してしまう自分の弱さ、みじめさに、どうすることもできないと打ちひしがれた時、キリストの恵みが見えるようになりました。弱く、不完全であるがゆえに、神様の助けを乞うことができることこそ、神の恵みであり、誇りだと気づいたのです。神を信頼するとは、自分の弱さを受け入れられるということです。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」

(Ⅱコリント 12:9)

### 3. 神の愛を受け取る

神様に全面的に依存するようになると、神の愛を全面的に受け取ることができるようになります。その結果、私たちは、自分を受容できるようになり、他の人を受容できるようになっていくのです。

イエス様は、私たちが罪人だった時に、十字架に架かってくださいました。その愛を受け取るということは、自分は罪人であり弱き者だと知った上で、「それでも私はあなたを愛する」という神の愛を受け入れることです。人にとって最も勇気のいることは、自分を肯定することだと言われます。しかし、「こんな私が愛されている」と受け入れることで、自分を受け入れることができるようになり、さらにどんな人をも受け入れられるようになるのです。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(Ⅰヨハネ 4:10)

「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。」(Ⅰヨハネ 2:1)

神に愛され、赦されたことを受け入れると、私たちは、人を裁かなくなり、愛せるようになっていきます。もし、あなたが嫉妬したり怒ったりしているなら、それはあなたが自分を受け入れていないことの表れです。私たちは、自分を肯定できる分量でしか、人を肯定できません。自分を愛するようになり、人を愛することはできないのです。だから、人を批判する人は、自分のことも受け入れられないのです。

人を裁く人は、こんな自分は愛されるはずがないと信じ込んでいるので、神様に愛されていることをなかなか受け入れられません。自分を受け入れられない人は、また人を裁くことを繰り返します。

あなたを愛するという神様の愛を受け取り、自分を肯定しましょう。「あなたがどんな者であっても、私はあなたを愛する」という神の愛がわかるようになると、悪に対しても裁く気持ちがなくなり、愛せるように変わっていきます。これこそが、私たちに最も平安を与えてくれるものなのです。

18世紀、メソジスト運動の発端となり、福音派の流れを作ったジョン・ウェスレーは、キリストがされたような良い行いを実行し続ければ救われると思っていました。当時はそのように教えられていたのです。ところが、宣教師として乗り込んだ船が嵐に遭った時、死の恐怖を感じた彼は、こんなにも良い行いを実践してきたのに、なお不安を覚える自分に愕然と

しました。その後、宣教も恋もうまくいかず、無力感と絶望に襲われたウェスレーは、逃げるようにイギリスに帰りました。この時の彼は、靈的に神に物乞いをするだけだったと、回想しています。しかし、魂がただ泣き叫ぶしかなかったその時、彼は、キリストが差し出してくれる救いをただ受け取ればいいのだと気づいたのです。こうして、彼の救いの世界が180度変わり、全面的に信頼する信仰に変わりました。宗教改革者ルターも、行き詰まり、無力感に襲われて、みじめさに気づいた時に、ただ神にすがればいいことに気づくという体験をしています。

神を信頼するには、絶望する勇気が必要です。そうすれば神が差し出す御手をつかむことができるからです。私たちはどうしても、絶望を避けようとして、見えるものをつかもうとしてしまいます。絶望を恐れず、神に目を向け、神が差し出す救いを受け取って、神を信頼することができれば幸いです。